

新病院長に聴く

独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）

徳山中央病院長

第 8 回

那 須 誉 人 先生

と き 平成 30 年 3 月 8 日（木）

ところ 徳山中央病院 院長室

〔聴き手：広報委員 津永 長門〕



津永委員 平成 26 年度から始めました県医師会報の「新病院長に聴く」として、昨年 4 月に徳山中央病院の病院長に就任されました那須誉人先生にお話を伺いたいと思います。遅くなりましたが、病院長ご就任おめでとうございます。まず、病院のご紹介をお願いいたします。

那須病院長 当院は社会保険病院時代も、独立行政法人地域医療推進機構（JCHO：ジェイコ）移行後も周南医療圏で高度急性期、急性期の医療を担ってきた病院で、現在もその状態は続いています。

津永委員 4 年前に前院長の井上先生にインタビューさせていただいた際には、JCHO に移行されたばかりで、職員や医師の退職など非常にバタバタしたと言われておられましたが、現在はいかがでしょうか。

那須病院長 ちょうど移行した時はいろいろな風評被害的なことがありまして職員、特に看護師が多数辞めましたので少し業務に支障を来したこともありましたが、この 4 年間で徐々に回復しています。移行後はいわゆるカルチャーショック状態でいろいろなルールも公設民営と公設公営とではかなり違いました。しかし時間の経過とともに現在は新ルールにも慣れてきている状況です。

津永委員 私たち周南市民は徳山中央病院が救急医療を縮小するのではないかと心配していました。

那須病院長 地域住民の皆様にはずいぶんご心配いただきましたが、幸い移行してから救急、その他の診療も縮小せずに運営をやってこられました。

津永委員 先生はこちらの病院に来られてどのぐらいになられますか。

那須病院長 30 数年になります。

津永委員 病院長になられて改めて見えてきた病院の課題等がありますか。

那須病院長 院長になって、いろいろな情報を全部目にするようになると、やはり全体像が少し見えて来ているところがあります。診療形態、医療器械等はもの凄く進んでいますが、それをサポートする部門等では相変わらず昔ながらのルールがまかり通り、ルールの決め方、動かし方等はスピード感に欠け、少し時代遅れかなという気がしています。現在は 507 床で運用していますが、職員の数も、私が当院に赴任した時と比べると凄く増えていて今は 1,000 人を超えています。そうすると病院組織の運用方法も少し違ってくると思います。また、昔であれば医療そのものについて、医師と看護師、受付の人が一人いればよかったものが、リハビリから NSW から診療情報管理士等いろいろな職種の方が必要という構造も全然違いますし、そこに医師事務作業補助者（クラーク）

が入ったりして、それをどこが管理するといった問題が出てきます。その辺が少し違うと思います。いろいろな意味で近代化が必要と思っています。

津永委員 JCHO になって電子カルテも導入されて、少しずつ近代化されていますよね。

那須病院長 医師の診療業務は近代化されていますが、それ以外の所が意外と古いままで運用しているように感じています。

津永委員 新病棟は建てられましたが、外来棟について建て替えの計画はございますか。

那須病院長 ここに移転してきたのが昭和 49 年だったと思いますが、そのままになっており、ぼちぼちガタが来ており、耐震補強もしないといけないわけですが、そうするのであれば建て替えた方がよいと思っており、現在準備中です。ただ、周りの医療を取り巻く環境が、人口の減少等今まで経験していない時代がくるので、今後どのようなスタイルが望ましいのか予想をつけにくく、みんなでいろいろ話し合っています、少し難しいところです。

津永委員 いろいろ考えられて改革を進められようとしていますが、JCHO になってから給料が下がり、モチベーションが少し下がったというような話も聞いたことがあります、いかがでしょうか。

那須病院長 JCHO に移行後は管理職には時間外手当が全く付かないというシステムでしたから非常にギャップが生じました。若い先生にとっては比較的良いとは思いますが、当院にはプレイングマネージャーが多数居りますので、そういった先生たちには非常に苦労してもらったと思います。社会保険病院の時がいろいろな意味で非常に自由度が高かったのですが、今は以前と比べ少し自由度は縮小傾向です。

また、医療業界全体も急性期病院には追い風が吹いていないこともあり、最初の頃は不満があったと思います。しかし、医師は誰も辞めずにその

まま残ってくれましたから、無事乗り切ることができ、残ってくれた職員には感謝しています。

津永委員 経営的には黒字ですか。

那須病院長 黒字経営はずっと維持していますが、一時期より圧縮されています。これは現在、日本中の多くの急性期病院の置かれている傾向と同じです。

津永委員 井上前院長が当直の問題を改善したいと言われていましたが、今、医師の働き方改革ということが盛んに言われていますが、これについての取組みはいかがですか。

那須病院長 若い先生方の時間外労働が一番の問題になり、いろいろ努力はしていますが根本的には人数をもっと増やさなければ、本当の意味での働き方改革は困難で、現在の救急、診療体制を安定して維持することは難しいかもしれません。また、仕事の仕方をもう少し要領よくしてほしいという現場の上の方からの声もあります。

津永委員 私はてっきり、今の若者の方は要領がいいかと思っていましたが。

那須病院長 要領が悪いという表現は適切ではないかもしれませんが、時間をかけてゆっくりされている先生も多いので。仕事を効率よくこなすことで、働き方改革を行うことも可能ではないかと考えています。

津永委員 若い先生が働きやすいようにしていただかないといけませんよね。われわれの時代は 24 時間働いて、そしてよく遊んでもいましたが、今の時代ではそんなことは考えられませんよね。

那須病院長 当時は何ともなかったことですが、今の時代にそれをするわけにはいきません。院長に就任してから一番心がけているのは、楽しく仕事ができることを目指しています。生きていくためには仕事をしないといけないわけですが、幸い、医療は人から感謝される仕事なので、寝ている時

間以外の生活の半分の時間をかけて仕事をやるわけですから、それが楽しくできないと、人生そのものが面白くないですからね。

津永委員 徳山中央病院は研修医にもかなり人気があると聞いていますが。

那須病院長 ここ 2 年ぐらい、県内で一番、研修医の応募の数が多いと思います。昨年、一昨年ともに 16 人で今年は 17 人ということです。何で人気があるのかとよく聞かれるのですが、研修医が少ない時代から見てきていますが、よくわかりません。一つには職員が研修医を大事にするということがあって、働きやすいことが口コミで広がっているのかもしれません。また、幸い、救急そのものは上級医がきちんと付いてファーストタッチできますから、いわゆる救急で一番基本になるトリアージの勉強にはなると思います。前日に診た症例は、すべて翌朝に救急科の医師、総合診療の医師、研修医全員が集まってカンファレンスしており、前日に診た症例をすべてピックアップして見落としがないか等を検討していますから相当力が付くと思います。

津永委員 専門医制度については、どのようにお考えになっていますか。

那須病院長 今すぐに影響はないでしょうが、徐々に出てくると思います。山口県全体で若い医師が不足しており、今年の県内の専攻医の応募は 40 数名で、去年より著しく減少しているのが現状です。それをご存じの先生方はずいぶん心配されており、このままでは山口県の医療は崩壊すると言われていています。若手医師が居らず、研修医も少なく、よそに比べて専攻医が少ない、この人数ではどうにもならないということでした。これが最大の問題だと思います。たまたま当院は新専門医制度下で、救急と総合診療の基幹病院として大学と協力しており、今年は幸い、当院の救急科を希望する専攻医が 1 人おり、産業医大や山大での研修を行いながら、徳山中央病院で主に仕事をいただいています。そういうことでもしていかなないと、従来のように大学から人が来るという時代

ではなく、これが最大の悩みです。

津永委員 山口県の医師数については、新聞報道でも若手医師が少ないとよく目にしていますが、それを解決しないことには働き方改革の実現は難しいですね。

那須病院長 夢のまた夢ですよ。医師が残ってくれないという現実を、県民の方にも真剣に考えていただかないと。今は何とか保っていますが、次の世代にはとんでもないことになっていると思います。

津永委員 次に、行政や県医師会に要望等がありますか。

那須病院長 現在、一番現場で困っているのは急性疾患を持った認知症患者さんの増加です。圧倒的に増えており、その場合は認知症もケアしなければいけないし、本来の病気の手当てもしないといけないわけですが、それを一般患者さんが居られる中で行うには困難を伴います。将来的にも身体障害を持った認知症の患者さんが増える予測されており、急性期病院での治療を要するような場合、ほとんどの病院には精神科がないので、従来でも精神疾患を持った方が急病になられた時の対応に関して問題が起こっていましたが、その問題が今後増えると思うので一番心配です。それに対して、国の政策としてスタッフが認知症に慣れさせておくようにと政策誘導で認知症ケア加算等を付けてくれています。実際には部屋に一人で置いておくわけにもいかず、症状が酷い人は必ず看護師の目が届くところにしか置いておけないので、本来であれば、そういった患者さんたちだけを少数でもいいから集中的に短期間だけ診療できる病床がほしいと思っています。ただ、医療行政上は精神病床となり、山口県の場合は精神病床が多めですので、新たに病床を作ることは困難だと言われています。かといって周南地区では精神病床そのものが他地域よりは少ないので、どうしたらいいのか困っています。認知症に対応できる人材だけでも育成しておけば、不十分かもしれませんが当院でも役に立つかなと思っています。

津永委員 認知症患者さんは本当に増えていますよね。私も、医師会病院で認知症の患者さんの手術をした当日の夜に「痛くないし、手術もしてないので、もう帰る」と言われて大騒ぎになって、知り合いの精神科の先生に相談し注射で落ち着かせ、家族にも泊まってもらったこともありました。

那須病院長 昔からそういったことはありましたが、その頻度が増えてくるというわけです。これは大変な問題ですが、認知症と救急の急性期疾患の両方に対応できる施設が少ないのが現状です。軽い認知症の、本人が自覚しておらずに入院後に発症するような患者さんは増えているので、特に当院は救命救急センターで軽症～重症の救急患者に対応しているからこそ余計にその必要性を感じます。従来みたいに疾患一つ、精神疾患だけ、身体障害の急性期の病気だけというように分かれてくれていたらいいですが、これからは一人の患者の中にいろいろな病気が同居するという頻度が増えていくと思うので、もう少し規制を緩めてほしいという気がします。

津永委員 高齢化と認知症はこれから必ず出てくる問題ですからね。

那須病院長 それが急性期病院と精神科病院のちょうど境目だと思いますので。今までは必要性を感じていなかったから施設がありませんよね。

津永委員 大学病院ぐらいですよ。県医師会報に掲載することで、少しでも行政にも声が届けばと思います。

次に先生ご自身のことについて、お聞かせいただけますか。

那須病院長 出身は松山市で、高校まで四国に居ましたが、大学受験で山口に来て以来、そのままずっと居ますので、山口県人みたいなものです。

津永委員 大学時代、部活は何かされていましたか。

那須病院長 硬式テニス部で、今でも時々しています。

津永委員 趣味は何ですか。

那須病院長 一時期、よく釣りに行っていたのですが、今はなかなか行けません。あと、趣味ではありませんが飛行機の歴史が面白く、今のものづくりとよく似ているので好きです。ただ、実際に乗るのは嫌いです。

津永委員 最後に座右の銘、又は好きな言葉を教えてくださいませんか。

那須病院長 特にはありませんが、根気よく諦めずに続けていれば、必ず実現するという感じはします。諦めた時点で終わりで、諦めずに何年かかろうがしつこく思い続けてやっていたら比較的、道は少しずつ開けると思っています。

津永委員 本日は大変お忙しい中、本当にありがとうございました。先生のこれからのご活躍と徳山中央病院がさらに発展されることを願いまして、インタビューを終わらせていただきます。

◇那須先生とは、徳山医師会でのお付き合いがあり、院長室には先生のご趣味の飛行機の模型が飾ってあって、温厚な先生でいらっしゃると思いますが、徳山中央病院について語られるときの眼光の鋭さが印象的でした。

